

性や障害に対する接点を提供し、
タブーの壁を崩していききたい。
——障害者の射精介助を中心に、「性の公共」を訴える。



坂爪真吾さん

一般社団法人 ホワイトハンズ代表理事
聞き手 太田美田紀 (ライター)

福祉の世界ではこれまで「無いもの」とされてきた「障害者の性」の問題に切り込む坂爪真吾さん。2008(平成20)年、障害者への射精介助を行う一般社団法人 ホワイトハンズを立ち上げ、現在、全国18カ所でケアサービスを提供しています。坂爪さんのこれまでの活動に対する思い、そして、坂爪さんの根底に流れる「性の公共性」への情熱について伺いました。

最低限の性の健康を促すためのケア

「まず、射精介助という言葉はあまり聞き慣れないものですが、具体的にはどのようなことを行うのでしょうか。」

坂爪 ホワイトハンズでは、射精介助についてこのように定義しています。「自力での射精行為が物理的に困難な男性身体障害者に対して、本人の性に関する尊厳と自立の保護、そして性能の健康管理を目的として、介護用手袋を着用したスタッフの手を用いて、射精の介助を行うこと」です。

現行の障害者福祉に関するすべての制度やサービスは、「障害者には性がない」ということが暗黙の前提として作られています。またそれ以前に、一般的にも、性に関する事柄は「社会的に有害なもの」であり、「公の場で語るべきではないもの」としてひとくくりにして考えられていて、多くの人が「見ないふり」を続けています。性欲があること、セックスをすることは人間として自然なこと、新しい命を産み育てることにつながるにもかかわらず、です。

それにはやはり理由があつて、性に関する商品やサービスが、男性の性的

PROFILE ●さかつめ・しんご●

1981年新潟県生まれ。東京大学文学部在学中、上野千鶴子ゼミに所属し、新宿・歌舞伎町などの風俗店利用者や従業員、経営者を取材。性風俗産業の問題点を明らかにする研究論文を発表。大学卒業後、高齢者や要介護者に対する傾聴サービス事業を立ち上げ、介護現場を知るためにヘルパーとしても経験を積む。2008年4月、障害者への射精介助を行う一般社団法人 ホワイトハンズを新潟市に設立。現在は全国18都道府県でケアサービスを提供している。

欲求を「非日常的な娯楽」として満たすための、いわゆるアダルト・性風俗産業しか存在していないからでしょう。いまのところ、日常生活の中で医療や福祉の観点から行われる性に関するサービスは皆無ですから。

そうした視点から、ホワイトハンズでは、身体的なハンディキャップを抱えた人の「最低限の性の健康」を促すために必要なケアのひとつとして、射

精介助のケアサービスを行うようになったのです。

大学時代、性風俗に関する研究に携わった

—坂爪さんは、東京大学に在学中、上野千鶴子さんのゼミで性風俗の研究をなさっていたそうですね。

坂爪 ええ。高校生の頃から社会学に興味があつて、社会学者の宮台真司さんの本をたくさん読んでいました。ちょうど宮台さんが援助交際をテーマに選んでいたことが話題になった時期ですね。私もそこから影響を受けているんだと思います。宮台さんが性風俗の世界から当時の社会について語っていることが非常に新鮮で面白かつた。もちろん、若さゆえの興味もあつたと思いますけれど(笑)。宮台理論にどっぷりハマっていました。

そんな憧れから東大文学部に進み、ら、企業や官庁に入ることは学校生活の延長のようで、あまり気が進みませんでした。「自分で何かしたい」と高校生の頃から考えていたので、事業を興すことも目標のひとつでした。かといって資金があるわけでもありません。スタートの段階ではお金がかからないこと、インパクトがあること、かつニーズがあつて、人手が少なくてもできることをやろうと考えたんです。

性風俗の現場で、傾聴ともいえるような、利用者の心の問題に耳を傾けるテクニックを持った従業員が多いことに気付いたこともあり、興味がありましたし、誰かに話を聞いてほしい人は多いだろうというところは想像できましたから、いろいろな意味で傾聴サービスは始めやすいものでした。

— 当時は高齢者が非常に注目されていましたが、話し相手がいけないことに悩んでいる高齢者や要介護者の方に対して、話し相手をマッチングする事業

上野千鶴子先生のゼミに入りました。社会学の中でもジェンダーとセクシュアリティをテーマにした研究を行うゼミで、とても人気があつたので、抽選でやつと入れたんです。そこで何かみんなが驚くような研究をしたいと思って、新宿の歌舞伎町の性風俗の利用者や従業員、経営者の調査をしました。タイトルは「機械仕掛けの『歌舞伎町の女王』」。性風俗業界の構造や問題点を明らかにすることが目的でした。

研究を通してさまざまな問題点が見えてきましたが、性風俗は「関わった人全員がもれなく不幸になるシステム」としか思えませんでした。性に關する問題は、非常に繊細です。本来は、人間の性機能やメンタルヘルス、病気などに関する専門知識がないと、健康面でも精神面でもとても危うい。けれど、実際には従業員がそれらを学ぶ場もありません。店で働く女性は、生活に困った人、心の病や性的なトラウマ

を思いついたんです。大学卒業間近の2005(平成17)年3月に立ち上げたところ、5月にはテレビ報道もされて話題になりました。高齢社会に必要なサービスとして注目されたのだと思います。ただ、ホームページを作ったくらいで十分にPRできず、話を聞いてほしい利用者より、話を聞きたい人からの問い合わせが増えるばかりでした。傾聴サービスに関しては、今は機能していません。傾聴ボランティアも広がっていますし、そちらにお任せすればよいかなと思っています。

利用者やスタッフの感想のフィードバックが重要

— 高齢者や障害者に対する事業をしたという思いはどこからですか？

坂爪 親戚の中には障害のある人もいますが、そんなに身近ではありませんでしたし、高齢者や障害のある方々を

を抱えた人たちが多く、状況を打開する最終手段でその業界に足を踏み入れてしまった従業員が大半でした。

そうした不幸をなくすためにはどうすればいいのかを考えました。「社会性」や、「倫理、衛生管理の基準」という明確なルールを導入して、すべての人が毎日の暮らしの中で安心して利用し、働くことのできるサービスとして生まれ変わらせることができれば、「関わった人全員を、もれなく幸せにできるシステム」として転換できます。そのために私も何かできないだろうかと思えるようになりました。

高齢社会に必要な傾聴サービスの立ち上げ

— 一方、大学卒業後は、高齢者の傾聴サービスを立ち上げたそうですね。

坂爪 もともと、私自身ずっと学校が肌合わないタイプの人間でしたか



身体障害で自立での射精が難しい方を介助。訪問介護の陰部清拭と同じ用品を使用し15分程度で行う

『性護基礎研修テキストI』



1,250円
(税・送料込み)

男性重度身体障害者に対する射精介助の具体的な理論・技法を図解と写真で分かりやすく解説したオリジナルの実践テキスト。介護職、介護事業所、福祉系専門職、医療系専門職向け。申込みはホームページ(www.privatecare.jp)より。

助けたいという思いよりも、社会にニーズがあるのに、これまでなかったサービスを産み出したいという思いからです。

2008（平成20）年には、本当にやりたかった性についてのことに踏み出そうと、射精介助を始めました。当初は、介護が必要な高齢者を想定していました。傾聴サービスをしていたので、介護といえば高齢者と思っていたのですが、高齢者からのニーズはほとんどありませんでした。実際に問い合わせや申し込みがあるのは、脳性まひの方が多かったのです。ホームページからの発信しかしていなかったのですが、要介護の高齢者だと、パソコンを操作すること自体が難しく、また、ケアマネジャーさんや家族の壁もあって難しいのかもしれませんが。

—これまでに大変だったことはありましたか。

介護士さんの話し合いで、「射精介助はできますか」「はい」という感じでさらりとできるといいのですが、そこが究極のゴールですね。

そういうと「介護士に性の介助までやらせるのか！」という批判的な声が出る場合もありますが、もちろん介護士全員に強制ではなく、できる人だけがいいんです。たぶん今でも、きちんとお伝えすれば、半数くらいの方は

坂爪 始める前は、スタッフが集まらないかもしれないと心配していました。けれど、スタッフの応募は想定していたよりも多く、現在でも毎週のよう新しい応募があります。一度利用していただければ安心して次回も引き続き利用していただける方が多いのですが、新しい利用者が増えるペースはそんなに速くありません。家族を説得するのはハードルが高いので、実際に利用できる環境の人は少なく、どうしても自立生活をしている人が多くなり、実際のニーズはまだまだあると思っています。

それと、外野からの批判もあるようですが、それはほとんど気になりません。一番痛い批判というのは、利用者さんやスタッフからの批判ですが、いまのところは大きな問題はないですね。こうした先駆的な事業では現場の反応こそが本当に重要です。どんな方が利用し、どんな感想を持っているの

理解してくださるんじゃないかな。認知を広めることも今後の課題ですね。

性や障害に接する場の提供で タブーの壁を切り崩す

—射精介助のほかに、さまざまなことを手がけていらっしゃいます。

坂爪 ホワイトハンズ大学は、オンラインの大学です。障害者や要介護者、

か、スタッフがどんなふうに住事をしたいか、仕事をしてどうだったか。現場がすでにありますから、そこを一番大事にしています。射精介助に関しては、実際にやってみて分かることも多いんです。医療関係の本を読んでも、医療の専門の方に聞いても分からないことばかり。そういう意味では手探りですから、やったことをフィードバックして改善していくしかありません。

実際に介護をされているヘルパーさんが理解してくださる場合には、ケアに協力してもらえるところもあります。場所を整えたり、ご本人の移動を手伝ってくれたり。大半は、話せば必要なことだと理解してくださいます。

射精介助は時間がかかることではないので、入浴介助の流れで一緒に行うと抵抗がないとも思います。わざわざ専門の人を呼ぶとなると、「後ろめたい気分」を払拭できないのは無理もありません。将来的には、利用者さんと

患者の性に関するケアガイドを公開したり、性検定を実施したり、テキストや白書の販売を行っています。定期的に、誰でも参加できる全国での勉強会やトークイベントも行っています。

性の問題は、人間の自尊心の根本的な部分に関わりますから、性検定も作りました。「性の介助」や「性的支援」に関する知識を深めるための検定で、「性に関する尊厳と自立」を守る



ホワイトハンズでは坂爪さんが講師となり、全国で定期的に勉強会やトークイベントなどを行っている。イベントや勉強会の告知、申込みはホームページ（www.privatecare.jp）から。『SEXWORK 3.0セックスワーク・サミット2012資料』『知的障害・発達障害児者への射精支援ガイドライン』『性看護基礎研修テキスト』『障害者の性』白書2012』『障害者の性』白書2011』など、さまざまなオリジナルテキストを作成し、活用している。

ことを目的としています。

セックスワークショップは、性風俗産業に携わる方、医療関係者、性に関する研究者、利用客などが一堂に会してセックスワークのこれからを語り合う場です。実際には、性風俗の世界で働いている人たちをどう救うのかという話に焦点が合うことが多いのですが、そこを出発点として何か探っていければと思っています。恋愛ではなく風俗でもない「性に関する新しいアプローチ」「性の公共性」とは何か。問題点を浮き彫りにし、これからできることをいろいろな立場からの視点で探っています。

ヌードデッサン会「ららあーと」も開催しています。参加を障害者に限定せずバリアフリーで行っているので、美大生や一般の方、お子さんもしれば、自閉症、発達障害、精神疾患の方の参加もあります。東京では人気が高く、年4回開催するようになりまし

ても後ろめたいもの、隠さなければならぬものというようなイメージを払拭していくひとつのきっかけにできればと思っています。

問題をシャットアウトせず 考え続けていきたい

風俗の世界では、発達障害や自閉症の方、子どもときに虐待を受けた方が働いていることもあります。社会にうまくなじめず、夜の世界に飛び込んで搾取されてしまうこともあるんです。養護学校の先生もそういうケースは少なくないと話していました。とても悲惨な世界なんです。自分がいなくてもいいんだと思える場所がそこしかないという若者もいます。そこを利用して搾取しているわけです。そうした性の悲しい面だけでなく、性の有用性をプラスの面で引き出せないかなど思っ試行錯誤しています。

性に関する活動は、エイズや避妊な



30代男性 (障害当事者)

20代女性 (美大生)



40代男性 (作家)

40代男性 (障害当事者)



バリアフリーのヌードデッサン会「ららあーと」は東京都内にて年4回開催。年齢、性別、職業、国籍、障害や病気の有無にかかわらず誰でも参加できる。画法の指導や解説はなく、「楽しんで描く」「自己の表現欲求を十分に発揮できたか」を重視

た。前回参加してくださった脳性まひの方は、腕の可動域が狭く、ヘルパーさんが画板を持って近づけて描いていました。そういう風景が同じ空間にありつつ、みんながそれぞれの絵を描く場所があるのいいなとあらためて感じる事ができました。障害のある方

どの啓蒙型の活動は多いのですが、それでは、「セックスは怖いもの」ということしか伝えられません。本来は命につながるようなものに、どうしてもタブー視してしまう。性教育も教育現場では難しいところに来ています。学校だけで限界があるなら、地域やNPO法人の活動で性教育ができないだろうかという気持ちもあります。本当は、性に関する悩みを話し合う場や勉強会などを保健師さんが主宰してくださればありがたいのですが……。

当たり前のことを当たり前にやるだけで、実はいろんな問題が解決できると思うんです。射精をしたけれど体が不自由だからできないなら手伝うとか、子どものつくり方が分からないなら教えるとか、そういう当たり前のことを当たり前にできていない状態と、それに対して誰もおかしいと思わないという問題があると思います。障害者の性問題は人ごとではなく、自分たち

と接することが少ないと、どんなことが不便でどんなことをしてほしいかが分かりません。なんとなく、「私たちとは違う人」という壁ができてしまいます。ヌードデッサンは、絵を通して性や障害に対する接点をつくり、壁を崩していくような作業です。性に関し

の社会問題にもつながっていくということも伝えていきたいですね。

問題があるときに必要なのは、シャットアウトするのではなく、考え続けることです。これからも、是非かという二者択一ではなく、できることは何か、できないことは何かを考え、一歩ずつ進めていくということを続けていきたいと思っています。

『セックス・ヘルパーの尋常ならざる情熱』



東京大学在学中の性風俗研究を発端として、さまざまな疑問を追究し、自ら行動をおこす様子をつづった著書。障害者への射精介助を行う非営利組織「ホワイトハンズ」起業の根底に、新しい「性の公共」を求める坂爪さんの情熱が読み取れる。

著者/坂爪真吾
小学館 101 新書 756円(税込み)